

第一回「三土新明会」



土湯こけしの世界

橋本 正明
Feb. 15, 2014

土湯のこけしは素朴か？



最初に読んだ「こけし・人・風土」の印象

「土湯のこけしは、温泉の湯気にぼけたような、独特の味わいを持っていて、そのつつましやかな味わいは、ちょうど雪まだ消えやらぬ野に、思いがけなく見出す初春の草花のように、一つの遠い世界への懐郷であり驚きでもある」（鹿間）



山峡の鄙びた温泉地に居る純朴な工人たちの手によって作り続けられてきた
“素朴可憐なこけし” だと思った。

私が集め始めた昭和39年頃は、その鄙びた温泉は、昭和2年、昭和29年2月の大火で皆焼けて失われ、その後再興し昭和34年開通した「磐梯吾妻スカイライン」の拠点として近代化したと聞いていたので、「俗化した魅力のない温泉地」になっているに違いないと思いこんでいた。

西山キクの話

- 交通の要衝
- 天領（幕府の直轄地）
- 六箇寺院
- 戊辰の役と焼き払い
- 常打ち芝居小屋と廻り舞台

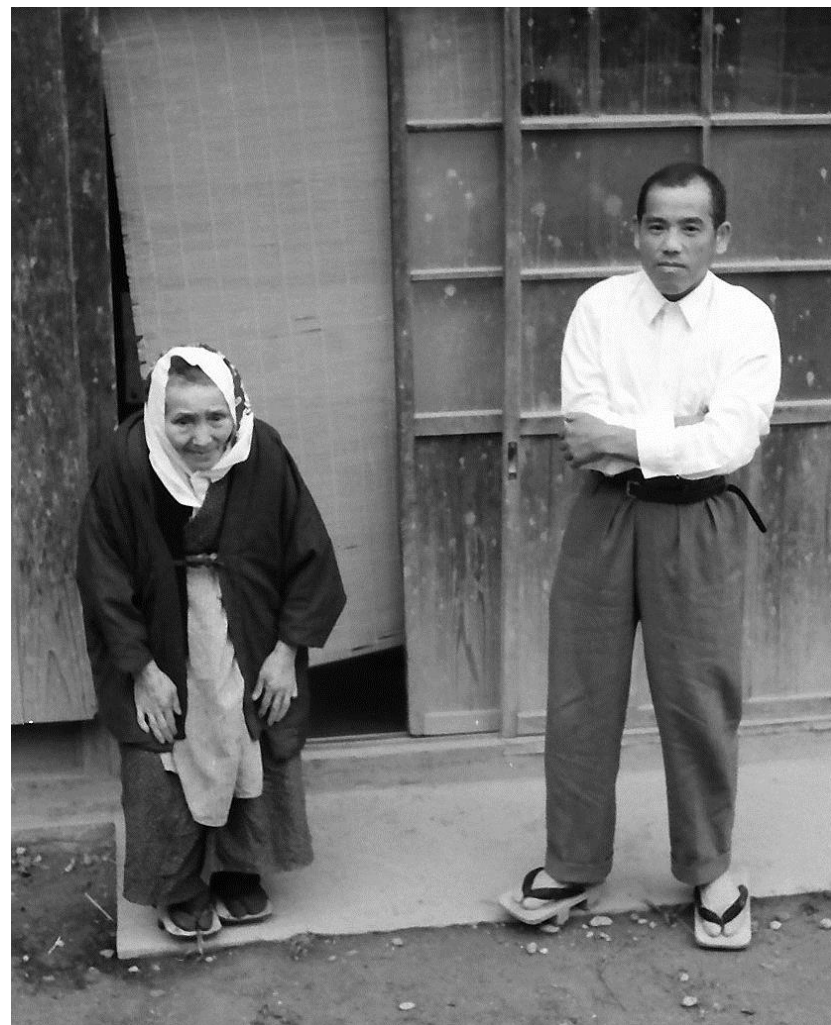


土湯は決して山峡の鄙びた温泉地ではなかった。



昭和40年 西山憲一の家

西山勝次妻女 明治18年10月22日生まれ
二階堂藤五郎長女（二階堂寅十[幸吉]の孫）

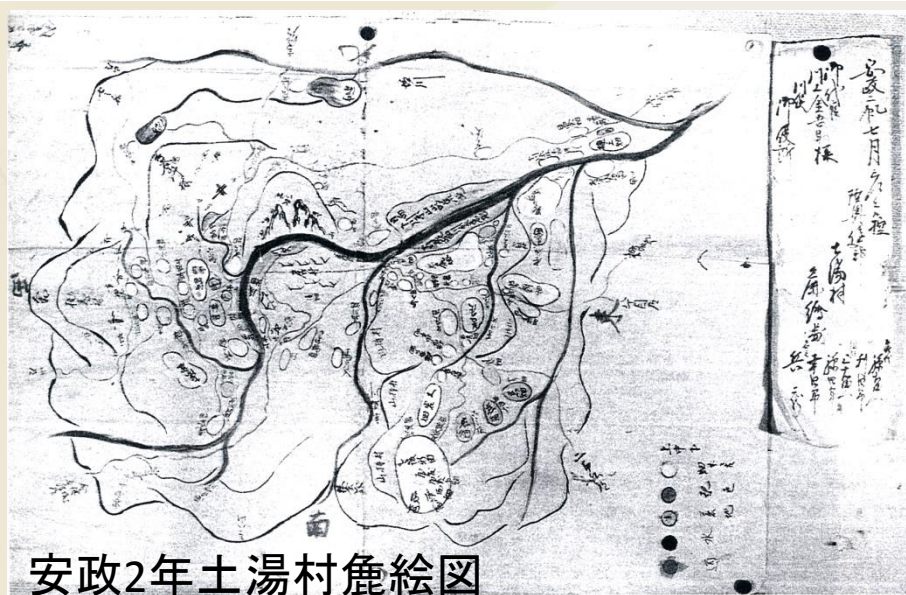


昭和41年 西山キクと西山憲一

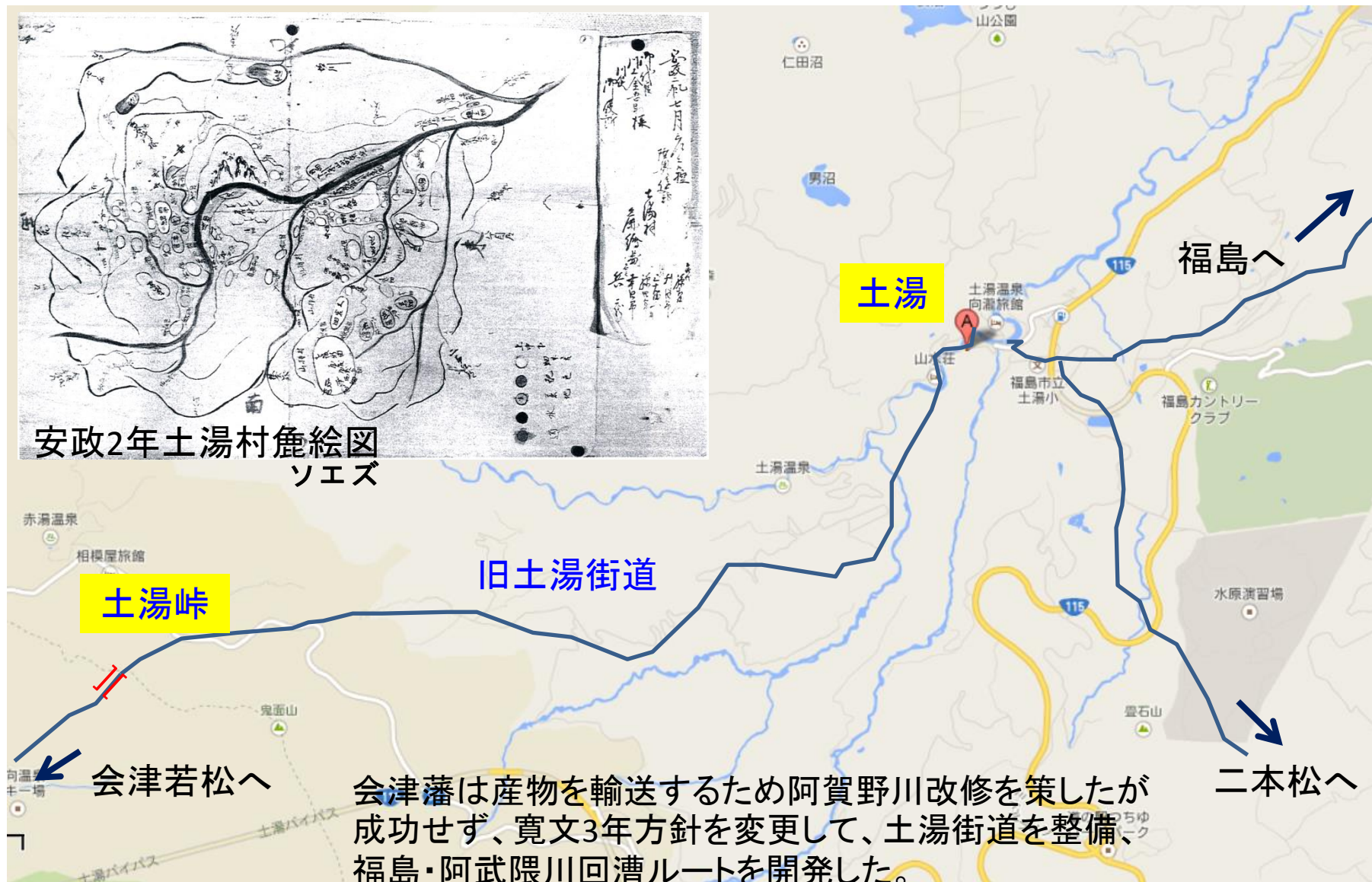
交通の要衝

土湯街道

会津若松と阿武隈川福島の船着き場を結ぶ 米と塩の道



安政2年土湯村絵図
ソエズ



会津藩は産物を輸送するため阿賀野川改修を策したが成功せず、寛文3年方針を変更して、土湯街道を整備、福島・阿武隈川回漕ルートを開発した。

近世土湯村の支配の変遷(1)

支配期間	支配陣屋	代官・大名	備 考
天正19(1591).9	会津黒川城	伊達政宗	
天正19(1591)～慶長3(1598)	会津若松城	蒲生氏秀 郷行	「文禄3年蒲生領高目録帳」土湯村高3石2斗8升
慶長3(1598)～慶長6(1601)	会津若松城	上杉景勝	
慶長6(1601)～寛文4(1664)	米沢城	上杉景勝 景定綱勝	
寛文4(1664)～寛文10(1670).6	幕領 福島陣屋	伊奈半左衛門 半十郎	
寛文10(1670).6 ～延宝6(1678)	幕領 福島陣屋	国領 半兵衛	寛文11年～延宝2 信達幕領総検地、土湯村は38石4斗6升9合
延宝7(1679)～天和2(1682)	福島城	本多忠国	
天和2(1682)～貞享3(1686)	幕領 福島陣屋	柘植伝兵衛	幕領桑折陣屋創設移転
貞享3(1686)～元禄13(1700)	福島城	堀田正正 仲虎	
元禄13(1700)～元禄14(1701)	幕領 福島陣屋	竹村惣左衛門	
元禄14(1701)～元禄15(1702)	幕領 岡陣屋	平岡十左衛門	
元禄15(1702)～宝永2(1705)	幕領 岡陣屋	池田新兵衛	岡陣屋新築 土湯村太子堂内に池田新兵衛墓碑あり
宝永3(1706)～享保1(1716)	幕領 岡陣屋	下島甚右衛門 甚九郎	「信達両郡古来書」
享保1(1716)～享保2(1717)	幕領 岡陣屋	森山勘四郎 飯島八郎右衛門 岡田庄太夫	「信達両郡古来書」 預り支配
享保3(1718)	幕領 大森仮陣屋	野田治郎左衛門	「延享4年大森御陣屋開発」
享保4(1719)	幕領 大森仮陣屋	柴田金右衛門 丹治久右衛門	「延享4年大森御陣屋開発」
享保5(1720)～享保6(1721)	幕領 大森陣屋	鈴木平十郎	「信達両郡古来書」
享保7(1722)～享保14(1729)	幕領 大森陣屋	岡田庄太夫俊陳 俊惟	幕領川俣陣屋兼任、享保11年より岡田俊惟
享保15(1730)～寛保2(1742)	二本松藩	丹羽高寛	預り支配
寛保2(1742)～寛保3(1743)	幕領 大森陣屋	佐山半十郎	
延享1(1744)	幕領 大森陣屋	陰山外記 宮村孫左衛門	当分預り支配
延享2(1745)	幕領 大森陣屋	佐々新十郎	当分預り支配
延享3(1746)～寛延2(1749)	幕領 大森陣屋	柴村藤右衛門	「延享4年大森御陣屋開発」
延享4(1747)～明和6(1769)	関宿藩	久世暉之 広明	前田陣屋支配土湯村など9カ村とあり、また一説には土湯村は含まない
寛延2(1749)～宝暦4(1754)	幕領 川俣陣屋	川田玄蕃	川田六左衛門と改名 寛延3年3月土湯碗黄山に関する文書は、川俣代官川田玄蕃とある
宝暦5(1755)～宝暦13(1763)	会津若松城	松平容頌	会津藩預り 郡代神尾大蔵 川俣・大森役所預り支配
明和1(1764)～明和4(1767)	幕領 川俣陣屋	山本平八郎	「川俣御代官記」
明和4(1767).11 ～12・20	幕領 川俣陣屋	宮林孫左衛門 前沢藤十郎	当分預り
明和5(1768)～安永6(1777)	幕領 川俣陣屋	藤本甚助	

近世土湯村の支配の変遷(2)

支配期間	支配陣屋	代官・大名	備 考
安永6(1777)	幕領 川俣陣屋	陰山外記	当分預り
安永7(1778)～寛政2(1790)	幕領 川俣陣屋	水谷祖右衛門	土湯村など天明元年より10カ年定免とする「土湯村近世文書」
寛政3(1791)～寛政6(1794)	幕領 川俣陣屋	大岡源右衛門	「川俣陣屋代官名」
寛政6(1794)～文化2(1805)	幕領 川俣陣屋	松下内匠	「川俣陣屋代官名」
文化2(1805)～文化5(1808)	幕領 川俣陣屋	大岡源右衛門	「信達両郡案内記」「川俣陣屋御代官記」
文化5(1808)～文化10(1813)	幕領 川俣陣屋	竹内平右衛門	桑折代官で川俣陣屋出張支配、桑折陣屋で病死
文化10(1813)～文化11(1814).2	幕領 川俣陣屋	竹内新八郎	桑折代官で川俣陣屋出張支配
文化11(1814)～文化13(1816).11	幕領 川俣陣屋	山本大膳	
文化13(1816)～文政5(1822)	幕領 川俣陣屋	寺西重次郎	桑折代官だが山本大膳支配のうち2万石余を加えて支配
文政5(1822)～天保5(1834).4	幕領 梁川陣屋	島田帯刀	天保5.4.19死去
文政6(1823).9 ～文政11(1828)	会津若松城	松平容敬	信夫郡大笹生村他12カ村預り支配「信達二郡村誌」「松平家藩」
天保5(1834)～天保6(1835).5	幕領 梁川陣屋	寺西蔵太 留次郎	当分御預所
天保6(1835)～天保8(1837)	幕領 梁川陣屋	島田八五郎	島田帯刀と襲名
天保8(1837)～天保14(1843)	幕領 川俣陣屋	野村彦右衛門	梁川陣屋とも支配、川俣本陣屋となり、梁川は出張陣屋「安政2年2月梁川陣屋旧記取調書」による
天保14(1843)～弘化1(1844).2	幕領 桑折陣屋	島田帯刀	川俣、梁川両陣屋預り
弘化1(1844)～弘化3(1846)	幕領 川俣陣屋	福田八右衛門	
弘化4(1847)～嘉永2(1849)	幕領 川俣陣屋	石原清右衛門	嫡子清一郎
嘉永2(1849)～嘉永3(1850)	幕領 川俣陣屋	勝田治郎	川俣、梁川両陣屋共
嘉永3(1850).5 ～嘉永6(1853).8	幕領 川俣陣屋	藤方彦一郎	川俣陣屋のみ
嘉永6(1853)～安政2(1855)	幕領 川俣陣屋	設楽八三郎	
安政2(1855).5 ～安政3(1856)	幕領 川俣陣屋	川上金吾助	
安政3(1856)	幕領 川俣陣屋	羽田十左衛門	「安政3年流失届」(『土湯村近世文書』)
安政5(1858)～慶応4(1868)	幕領 川俣陣屋	森孫三郎	
明治2(1869)	川俣民政局役所		

江戸時代のほとんどの時期、土湯は幕領(天領)だった。全部で7回。幕領の期間は寛文以後(1661-1868)の207年間のうち143年間におよぶ。

• 六箇寺院

伝説としては6つの坊舎が立てられたと云う口伝がある

「坂上田村麻呂の命令で吾妻山の中腹に吾妻権現（鎮守神）を祀り、六院の坊舎を設けたので靈験著しいご利益を願う善男善女が陸続としてこの地に雲集し、突湯の名声は頻りに挙がった」（土湯木でこ考）

六院の名は、「西海子坊、松之坊、柱之坊、卒塔婆坊、榎之坊、柿之坊」



出典不明ながら、六院の名も伝えられているから、土湯では長く信じられていた口伝であったろう

突湯：土湯の古名

• 戊辰の役と焼き払い

1868年（慶応4年）8月2日、戊辰戦争の折に、会津軍はこの村を撤退するときに、西軍の拠点になることを恐れて、土湯の全村に火を放った。（Wikipedia）

土湯木でこ考・第三集には「戊辰戦争の飛び火」という章があり、経緯がさらに詳しく描かれている。

- 常打ち芝居小屋と廻り舞台



アサヒ写真館 佐藤一弘さんは、『この駐車場になっている場所に「芝居小屋」があったと聞いている』と語ってくれた。興徳寺入口のすぐ隣りである。

キクさんは『その当時、廻り舞台がある芝居小屋は京祇園と土湯だけだった』と言っていた。

廻り舞台について

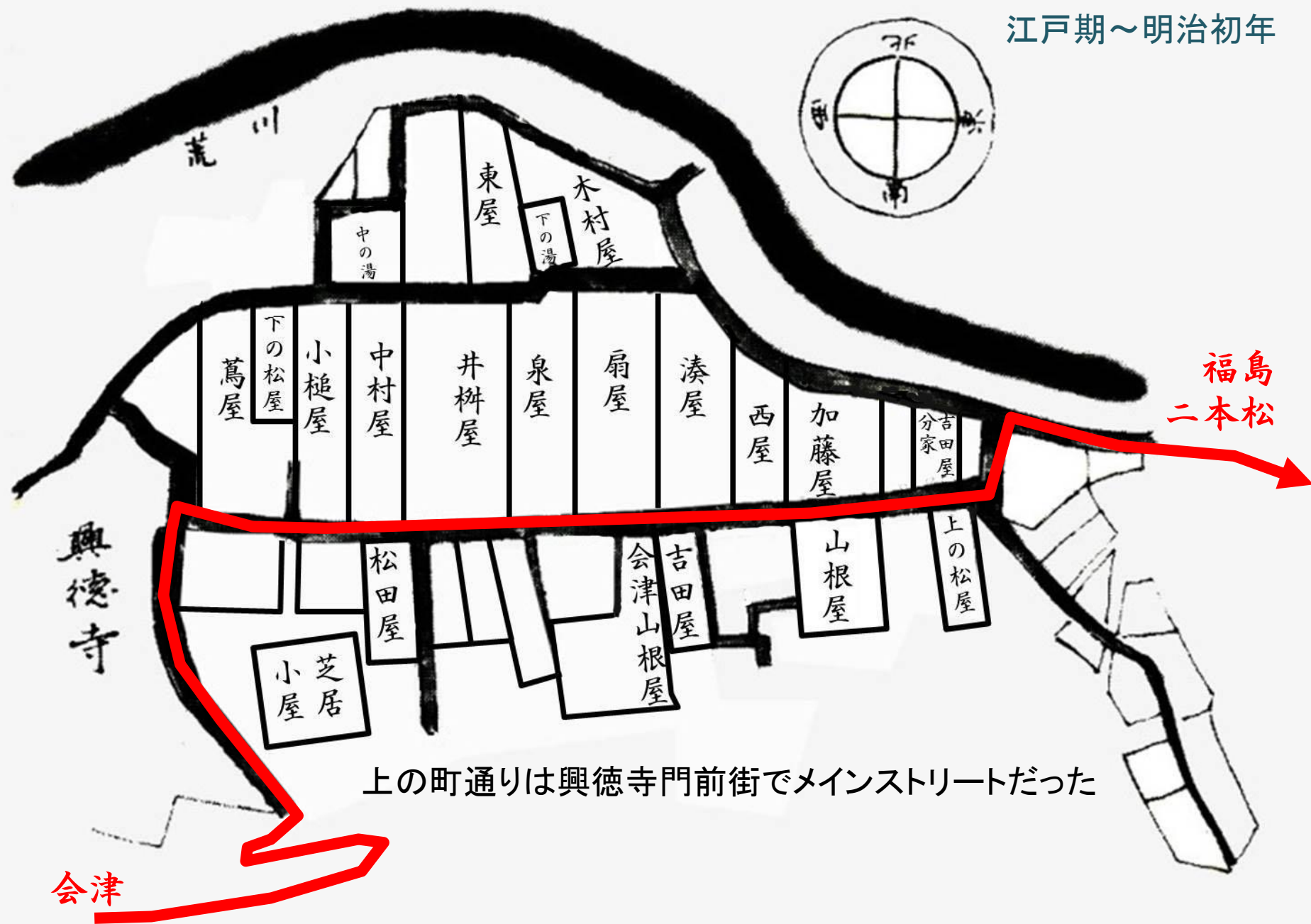
正徳・享保期(1711-36)に江戸で活躍した狂言作者中村伝七が考案した〈ぶん回し〉が初期のもので、その後大阪で宝暦期(1758)並木正三がいまの〈廻り舞台〉を案出した。

歌舞伎の盛んな京大阪・江戸では廻り舞台は当然あったであろう。



会津街道(土湯街道) 土湯の上の町通りを貫いて通っていた

江戸期～明治初年

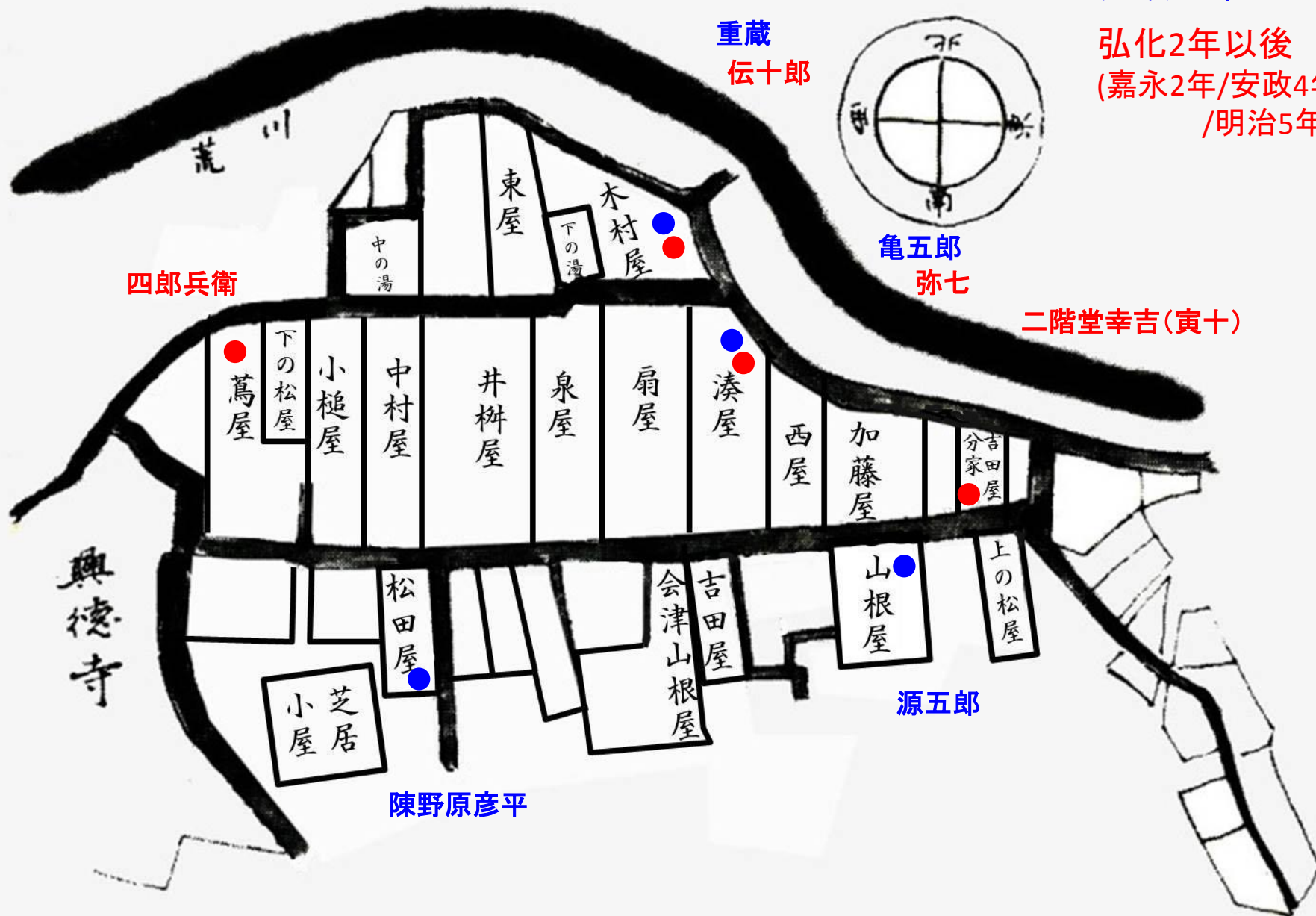


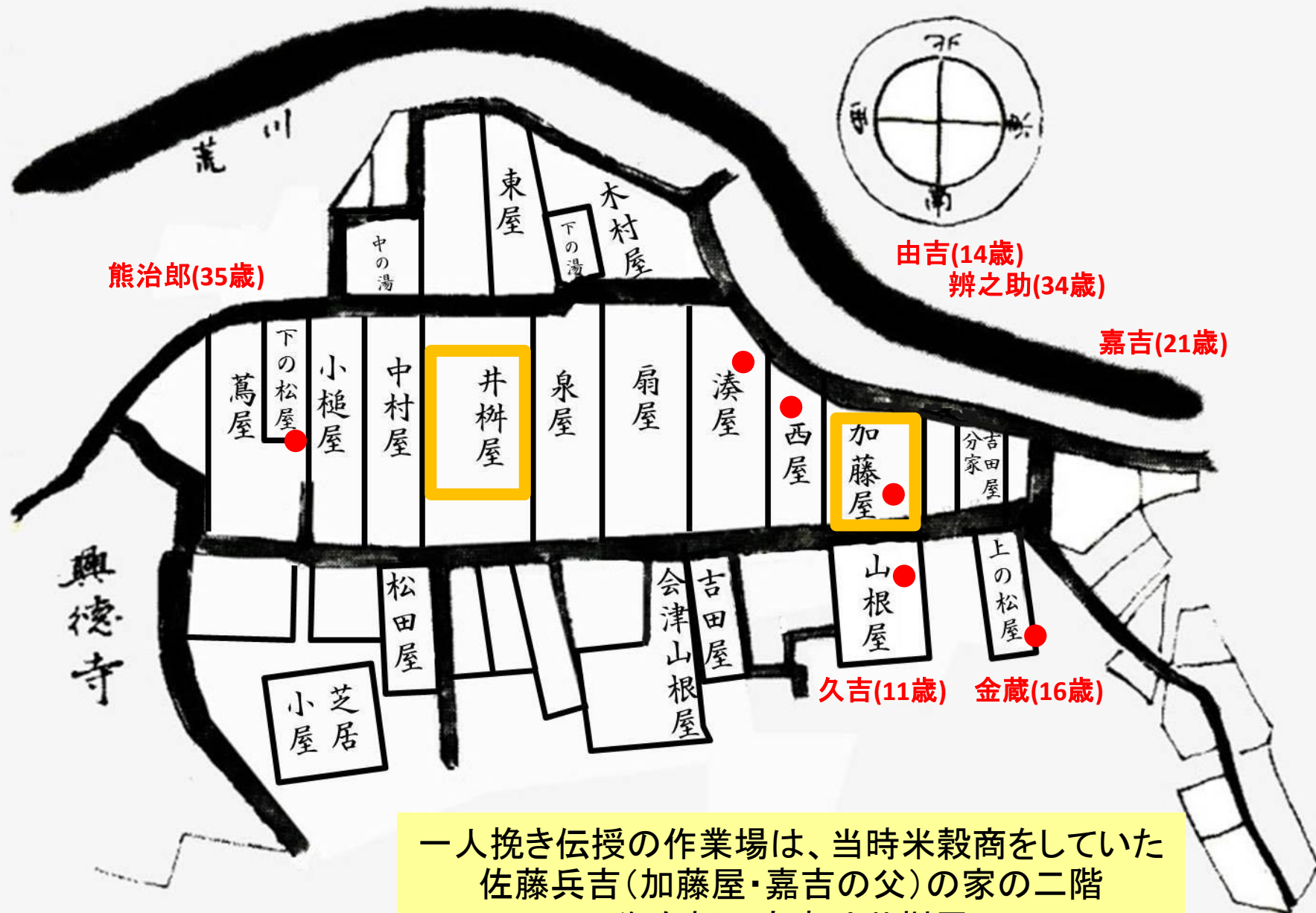
上の町通りは興徳寺門前街でメインストリートだった

土湯の木地屋 (1) 氏子狩に応じた木地屋

文政10年

弘化2年以後
(嘉永2年/安政4年
/明治5年)





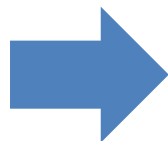
一人挽き伝授の作業場は、当時米穀商をしていた
佐藤兵吉(加藤屋・嘉吉の父)の家の二階
為次郎の定宿は井桁屋

土湯こけしの特殊性 = 産地土湯の特殊性

土湯は昔から

決して「山峡の鄙びた温泉地」ではなかった。

- 土湯の特殊性
 - 交通の要衝
 - その当時としては珍しいほどの高い経済活動
 - 各地の産物や商品と接する機会
 - 経済活動に伴う文化活動
 - 演劇
 - 俳句
 - 寺子屋



文化濃度が高い

“土湯十楽、飯坂九楽”

土湯



飯坂



弥治郎の作者でも、文化濃度の高い飯坂に
来ると、こけしの情味が変わる

俳句

佐久間浅之助

かき合すそでや 余寒の馬の上
風音の こずえに残る 余寒かな
身不肖も 君なもまぢる 花見かな

其月

寺子屋

渡邊源五郎が村民10名で伊勢・金毘羅参りの
帰途、京の旅籠に泊まったところ、出された宿
帳に自分の名を書けないものが7名もいたのを
知って、北野天満宮に祈願して、帰郷後土湯に
寺子屋を開いた。

その寺子屋で学んだ作蔵は群を抜いて優秀
だったために、源五郎は孫娘クラの婿として稲
荷屋から作蔵を迎えた。



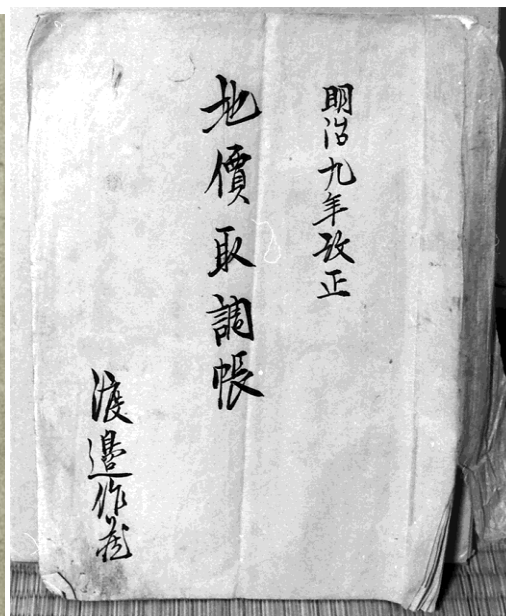
文政6年3月 金毘羅碑 施主源五郎

渡邊作蔵

村会議員も長く務めた。
福沢諭吉に私淑した勤儉力行の人。



作蔵と妻女クラ(源五郎孫)



太子堂奉納の燭台 明治38年



明治時代の土湯 川向こうから見た下の町



む望を町の下場泉温て隔を河荒

(所名泉温湯土縣島福)

明治時代の土湯 下の町



(一其) 景の館旅各場泉温湯土縣島福

昭和初期の土湯



全景



下の町

土湯災害史

延宝8年(1680)	8月から大雨、荒川大洪水
貞享元年(1684)	荒川大洪水
元禄元年(1688)	荒川大洪水
宝永7年(1710)	荒川洪水
享保19年(1734)	荒川氾濫
明和3年(1766)	6月 荒川洪水
天明 4年(1784)	大凶作餓死者36名
天明 7年(1787)	6月13日 土湯村で、鳥谷場山崩れ、死者22名
文政7年(1824)	8月14日 土湯村で、家屋流失10戸、埋没3戸松川大洪水
嘉永 3年(1850)	土湯大火 興徳寺本堂焼失
天保2年(1831)	7月16～18日 土湯村で家屋浸水、8戸流失、3件崩壊、畑地2反
安政3年(1856)	8月24～25日 土湯村家屋流出5戸
文久3年(1863)	5月2日 荒川上流で堤防欠壊
慶応 4年(1868)	戊辰の役 会津軍による全村を焼き打ち
明治23年(1890)	8月 大水害
明治36年(1903)	大水害 浅之助貯木を失う
明治43年(1910)	8月 台風による洪水
大正2年(1913)	8月 台風による洪水
昭和 2年(1927)	土湯村大火
昭和13年(1938)	大洪水 土石流
昭和29年(1954)	土湯村大火、102軒焼けて1名死亡

このように度重なる災害に逢って古いものはほとんど失われたが
今 往古の土湯を偲ぶものとして



地図をクリック



次回 4月
「土湯こけしの世界」 その2
聖徳太子の血と地蔵菩薩の円光背

Back up

例えば俳諧や和歌

江戸時代の文化・文政の頃、土湯は俳諧の地としても知られ、多くの俳人が輩出されました。この俳人たちの集まりは「土湯連」と呼ばれ、多くの歌や俳諧が詠まれました。その土湯連の一人「鳩麿」によって読まれた歌集が「温泉八景」というものもある。

一、鬼面山の暮雲

久方の雲井はるかに 見降れば 鬼面山のゆきの夕ぐれ

二、荒川の夕照

湯返りにまい坂こして 見かへれば 夕日にかかる荒川のなみ

三、烏川の晴嵐

照り渡る 日もななめして烏川 浪にたちそう橋はしらかな

四、太子堂晩鐘

吹きさそふ風にともなふ 鐘の音も みあらか清くひびくかしこさ

五、松ヶ窪の夜雨

名にしおふ信夫の山の 松ヶ窪 やみ夜さやけき雨のおとかな

六、熊野山の秋月

さやかなる熊野の山の はし紅葉 赤らむ頃の秋の夜の月

七、男沼の落雁

なみたつる男沼の岸に かけとめて 声もさやかに落つる雁かね

八、女沼の帰帆

女沼こそ水も澄むらめ 舵とりて 浪間に返るかづの釣船